

## 令和7年度第2回京都府総合教育会議

- 1 日 時 令和8年1月20日(火) 午後1時から2時30分まで
- 2 場 所 京都府自治会館 4階 自治会館ホール
- 3 出席者 西脇知事、前川教育長、小畑教育委員（教育長職務代理者）、  
安岡教育委員、藤本教育委員、鈴鹿教育委員、植木教育委員
- 4 次 第
  - (1) 開会
  - (2) 意見交換
  - (3) その他
  - (4) 閉会

---

### 1. 開会

#### ○出席者紹介

#### ○知事挨拶

皆様、本日はお忙しいところ、総合教育会議に御参集いただき、誠にありがとうございます。この会議は、教育委員会の皆様と、現在の京都の教育行政を取り巻く現状と課題を共有して、今後、連携して講じていくべき条件整備や重点施策について議論していきたいと思っております。

今、私ども、京都市長との間での府市連携を受けて、府立高校と市立高校の垣根を越えて、探究活動の成果を合同で発表する「京都探究エキスポ」を昨年度から実施しております。

この取組のさらなる発展を目指して、今年度からは、新たに歴史的な建造物を舞台にして夏の2日間、「京都探究クエスト」を実施し、探究を深めたところです。

昨年12月の「探究エキスポ」には、1,200名を超える方が集まりまして、探究活動の成果を発表し合い、慶應義塾大学・安宅先生と東京大学の鈴木教授の講演、講評、パネルディスカッションをさせていただきました。藤本委員には御参加いただき、どうもありがとうございました。この探究エキスポ・探究クエストの開催に御尽力いただきました関係の皆さまに、感謝申し上げます。

さて、本日のテーマは「大阪・関西万博の教育現場での活用について」ということでございます。一昨年にはなりますが、5月に、この会議で「子どもたちにとっての大阪・関西万博」ということをテーマに、万博の意義とか気運醸成、子どもたちとの関わりについて貴重な御意見を賜りました。

万博期間中、京都府では、関西パビリオン・京都ゾーンでの展示のみならず、府内各地で関連イベントを開催いたしました。それを通じて、国内外の多くの皆さんに京都の魅力を体感いただきました。

また、「子どもの大阪・関西万博体験支援事業」において、学校行事で万博に行く際の入場料を全額負担することで、6万人を超える児童生徒の皆さんに万博を体感いただいたところでございます。

万博はゴールではなく、未来へのスタートでございまして、未来を担う子どもたちにとりまして、万博を通じた学びや経験が、これからの人生の中で訪れるだろう様々な舞台で具体化されることを期待しておりますし、この経験を京都の高校での探究型の学習に取り入れることで、是非とも、教育活動の充実にも活かしていただきたいと思います。本日は、万博は閉幕しましたが、教育現場での活用がどのように行われたかということと、これからの活用についての御意見を賜りたいと思っております。よろしく申し上げます。

#### ○前川教育長挨拶

教育委員会を代表して御挨拶申し上げます。これまでの総合教育会議では、教育現場の視察だけではなく、様々な教育課題や現状について御意見を頂戴してまいりました。有効な施策を考えていく上で、大変貴重な機会でございます。定例の教育委員会では、議題も多く、特定のテーマについて踏み込んで教育委員会の皆様から御意見をいただくことがなかなかない中、知事にお呼びいただいて、こういう形で議論ができるというのは、大変ありがたいと思っております。企業、大学等との共同による探究学習の深化ですとか、海外留学の拡充、ICTを活用した教育の施設設備の整備等、学校教育の充実に向けて、しっかりと取り組んで参りたいと考えております。

そういう中、本日のテーマは大阪・関西万博の教育現場での活用について、特に今後の姿について、御意見を頂戴したいと考えております。

後ほど、教育委員会の方からも報告をさせていただきますけれども、当初に希望調査で聞いておりました数よりも大きく上回る数の学校の参加がございました。子どもたちがどういうことを感じ、何を学んだのかを、今日報告させていただきます。それを踏まえた上で、今後どのように展開していくか、貴重な御意見を頂戴したいと思います。本日の会議が教育の充実につながることを願っております。どうぞよろしくお願いいたします。

## ○「大阪・関西万博の教育現場での活用について」～概要説明

(総合政策環境部 岡本部長)

(文化生活部 嶋津部長)

(教育委員会 相馬指導部長)

## ○意見交換

(西脇知事)

一昨年の5月に万博をテーマに総合教育会議で議論させていただいて、非常に良い評価をいただきました。2回もやるのはどうかという話もあったのですが、万博を振り返るなら、このタイミングしかないかなと思ひまして、今日、議題として選ばせていただきました。

時間制約があるのですけれども、前半後半に分けて、前半は、今紹介した色んな万博での活動等を見て、皆さんがどういう評価をされるかとか、子ども達にどんな影響があったのかということも言っていた上で、今後の教育活動にどうやって展開していくのかを後半でお伺いしたいと考えております。

実は316校、約62,000人の子ども達に、我々の制度を利用して万博に来ていただいた、ここは一番把握しやすいが、それ以外の大勢の子どもさんも万博会場に行っておられますし、ここで紹介しきれない、様々なことが行われました。そういう紹介したものだけではなくその他の取組も含めまして、今回の万博活動で、生徒たちにどんな学習効果を与えたのか、その辺りの評価などをまずは御意見いただければありがたいと思っております。

(小畑委員)

それでは私から、申し上げたいと思いますが、色々御説明を聞いていると、もう本当にすごいことを色々沢山やっておられるということで、あんまりこういう報告を聞いた後に言うことがなくなってしまうような感じもするのですけれども、学習の効果っていうことを考えていく上で、学習の効果って、何が起こったら効果があると思っただけなのかということ、きちっと押さえておく必要があると思ひます。

おそらく、この学習の効果ってというのは、子ども達が万博で体験をした、その体験が体験にとどまらずに、将来に向けての思いとか、将来に向けての希望とか、あるいは将来に向けての動機づけとか、そういうものに昇華って言うのですか、そういうことができているかどうかということが、効果だと思ひます。もしも、そういうことができていて、子どもの心の

中に体験が何か昇華した、将来への希望とか、思いとか、そういうものが芽生えたとしたら、それが、私は万博の非常に大きなレガシーになるのではないかと思います。だから、効果とか、レガシーっていうのは、本当に子どもの心の中、頭の中に生まれたかどうか、芽生えたかどうかを検証していくことが大事じゃないかと思います。

検証するに当たっては、2つのことがあるのではないかと考えていて、1つは、教育のプロジェクトが最後まで回りきっているかということです。教育のプロセスというのは、子どもを万博に連れて行くと、その時にどういう学習の狙いを持って連れて行ったのですか、それに向けてどういう事前の学習をしたのですか、戻ってきてから、皆で体験を振り返って、その体験を自分たちのその将来の思いとか、何かこう希望とか夢とか、何かに繋げるような、昇華させるような教育的な努力をしましたか、そして、最後に本当に子どもの頭の中にそういうレガシーが残ったかどうかという、そういうプロセスが回りきっているかどうかということ、検証していく必要があるのではないかと思います。

先程、色々な御報告を伺って、その狙いとか、やったことは、非常に多彩なことで、グローバルもあるし、非常に素晴らしいことだと思うのですが、本当に子どもの心とか頭の中に、そういう体験が、昇華したレガシーが残ったのかどうかというと、色々御報告を聞いた中には、これきっと残っているなと思うような話もあるし、これはちょっと途中で終わっているのではないかというものもあるのだけれど、ちょっとそこまでよくわかんないですね。だけど、その教育のプロセスが全部回っていないものがあつたとしたら、そこを何とか上手く回り切らせるということが、これからの教育の展開ということの中の1つの大きな課題ではないか、それがきっと2つ目の、今日の議題になるのではないかなというふうに思います。

もう1つの検証はですね、私は子どもの側に立った、子供の立場に立った検証をしていく必要があるのではないかとということです。私が申し上げた効果、定義というのは、つまり、子どもの心の中に、頭の中に、体験がどういうふうに将来に繋がるものに昇華したかということだというふうに申し上げたわけですが、ということは、つまり、子どもがどう考えて、思ったかということ、しっかりと検証する必要があるというふうに思います。

先程の御説明は、教育委員会の報告にあつたように、子供の感想ということもあるのですが、多くはそういう企画をした学校とか、先生がどんなことを考えてやったら、それで、その結果としてこんなことができたという、学校とか、先生側の評価、効果が出てきているように思います。やはり、子どもの側に立って、もう1回検証し、そして、子どもの中で、どんな体験をしたのか、それがどういうふうに思い、評価したのかということを見える化をしていくということが必要なことではないか、というふうに思います。

何でそういうことを言うかという、この間、スクールミーティングで、ある小学校の低学年の教室に行つたんです。そこに、万博の感想が貼つてあつたのです。感想を読むと、お弁当が美味しかったとか、バスが楽しかったとか、迷子にならなくて良かったとか、そういうことがいっぱい書いてあつたのです。本当に感じたことだから、別に悪いことじゃないけれども、狙いから言えば、ちょっと残念なことだし、本当にそこで止まっていたとしたら、さっき申し上げた教育のプロセスっていうのが、やはり、体験のところで終わっているということです。

だから、そういうことがわかることが大事なのです。それは、子どもの側になって検証したら、初めてわかるのです。それが分かつたら、次にどういう努力をして、教育のプロセスを最後まで回して、子どもの心の中にレガシーを作っていくかということが、わかるから、対策に従って、より大きな、より沢山の子どもたちの心の中に、万博の本当のレガシーが生まれて、それが将来に向けたその社会の発展とか、技術の革新のエネルギーになっていくと、こういうことなんじゃないかなと思っています。だから、こういう楽しい素晴らしい御報告があつただけけれども、もう1回、その教育のプロセスが全部回っているのか、それから、子どもの側に立って検証ができているのかという、その両面から、もう一度踏み込ん

だ検証というのをしていくと、効果とか成果が、さらに新しく出てくるかもしれないし、問題が明らかになって、ではどうしようか、そして、それをうまくやれば、もっと広く、子ども達にレガシーが生まれて、それが将来の社会のエネルギーになっていくのではないかな、そういうことを、もう少しやってみたらどうかということを思います。

万博の効果をどう思うかと問われても、ちょっと私あんまり情報がないものですから、そのことについては、ちょっと控えますけども、そういう、効果の検証のプロセスということについて、もう少し考えてみたらどうかということを申し上げていきたいと思います。

#### (藤本委員)

小畑委員が検証とか、色々おっしゃっている通りだなと思ってお聞きしておりました。やはり、このテーマは難しいというのが率直なところですが、まずもって、やはり学校現場の先生方、もちろん、校長先生をはじめ、クラスの担任の先生だけじゃなくて、学校をあげて、様々なやりくりを具体的にして、協力して、保護者の協力を得ながら、忙しい中で動かれたってということが、62,000人もの、児童・生徒さんが参加されたという事実につながったのは非常に素晴らしいことだなというふうに思いますし、これはやはり、京都府教育委員会を中心とした様々な投げかけというものが、こういう結果を生んだのだと、まずそこは、本当に素晴らしい取り組みをされたなというふうに、心から申し上げたいというふうに思います。

その上で、その学習効果はどれぐらいだったのかっていうのは、小畑委員も仰っていたけれど、これからの問題なのかなというふうな気がしております。もちろん、児童・生徒の中には、高い意識を持って、家庭でも、様々な保護者の方が、事前に家庭で行かれて、学校だけじゃなくて、色々なケースがあると思うので、一概に言えないと思うのですが、おそらく、学校行事として行ったのが初めてだったという人が多いのかなという、安易ですけど推察されます。そういう人達にとったら、小畑委員が仰っていたような、バスで行ったのが楽しかったとか、お弁当が美味しかったとか、そういうレベルだと思うのですが、そうであっても、やはり、千載一遇のチャンスで、本当に、学校単位で行けたという、中々、本当に経験できないことを経験できたこと、それがまず、本当に素晴らしいことであつたのではないかなというふうに率直に思います。

どうしても、大人はすぐに、結果とか、成果を求めたがるのですが、そういうものではなくて、何か、子ども達の好奇心に何かしらの火が着いたら、本当にそれが素晴らしいことに繋がっていくのではないかと、やはり長期的に見ていく、でも、そういう恰好の素晴らしい、国際的な場がそこにあったという、そこにめぐり合ったということは素晴らしいし、その後、やはり今後どのような取組をしていくかということで、成果が大きく出るとか、それが1発打上げ花火で終わるとか、それは様々であるというふうに思います。

そう考えると、事前の先生方のこの取組への興味・関心と言いますか、やはり、引率していく先生方の問題意識、課題意識、興味関心というものが、どれぐらい持っていたのかということもすごく大きいと思いますし、興味があんまりなかったけど、行ってみたら、凄く色んなことに気づけたとか、そういうことも含めて、学校現場の先生方の率直な、事前の取組も含めた、当日も含めた、様々な、いわゆる評価、自己評価も含めて、そういうような生の声をここから抽出して、ここから、どんな取組を学校現場でやってみたいとかというようなことも、是非、またこれを進めていくことが大事なのかなというふうに思ったりします。

やはりどうしても、事前の学習がそれほど、行き届いていた学校ばかりではないと思うのです。それは、どうしても致し方ない。そうすると、当日行くのは、どうしても、興味本位で、鑑賞みたいな感じになるのです。鑑賞で見て見たこととか、聞いたことを、先生方を中心にして、どのように、それを探究に持っていかとか、興味・関心に継続して持っていかとかというのは、小畑委員がおっしゃるように、教育として回り始めていく、そういうきっかけで動くスタートなのかなというふうに思うので、そういう鑑賞して得た知識というのをど

のように持っていけば、それが子ども一人一人の教育に繋がっていくのかなというのを考えるのも大切だと思います。

私の知り合いのお子さんが出て、小学生ですが、学校でちょっと不登校気味になっていて、夏休みに悩んでおられたのですが、夏休みを利用して、家庭単位ではありますけれども、万博に行かれて、凄く、その万博で自分の興味に火がついて、何回か通って、それで本当に何か、夏休み中、本当に有意義に前向きに生活できるようになって、夏休み明けに、小学校に生き生きと通っているということです。そういう教育効果っていうのは、目に見えないけれども、何か子どもの気持ちに、自分のやりたいことが見つかったみたいな、そういう力をきっと持っているのだからというふうに思いました。ただ、そんな部分も含めて、また後半も、色々なお話ができればなと思います。以上です。

#### (植木委員)

最初は、あまり来る人がいないじゃないかという前評判でした。それは、前回の万博のような、月の石のような目玉がないのではないかということと、もう1つは、今は手軽に、SNS、ネット上で、様々な情報や知識を得ることができるので、わざわざ出かけて行って、世界のことを知ることを別にしなくてもいいのではないかというような、そういうことが言われていたと思うのですが、蓋を開けてみれば、非常に大勢の人達が訪れたということで、なぜそうだったのかっていうことは、今後の学校現場での様々な取組にも活かせるようなポイントが含まれていたのかなというふうに感じます。

私は3点ほど、大事なことがあったと思うのですが、まずは、知識を得るという時に、何を学ぶかということと、誰から学ぶかをまずそれを挙げやすい、思い起こしやすいとか、何々先生から何々について学ぶということが、教育の知識を享受する、伝授するという所では、中心的な形ですけれども、誰と学ぶかということは非常に重要なのではないかと思います。先程も話が出ましたけれども、学校単位で、皆で行ったという、一方的に学ぶ、知識を享受するというのではなくて、横の繋がりや、それについて話し合ってみるとか、誰と学ぶかということ、非常に主なポイントなのかなと感じます。それが1つ目です。

2つ目は、五感を通じた学びということで、食べ物の中にも出ましたけれども、味覚や嗅覚を駆使して、オンラインも様々な情報を得るという手段ですから、視覚・聴覚は使うと思うのですが、味覚や触覚、嗅覚を駆使するという、そういうものを自分の中に、本当に取り込んで噛みしめるとか、そういうところに大きな力を発揮するのではないかなと思います。この辺りは、コロナ禍を通じて、もの凄く感じたところで、大学では、オンライン授業が、かなり浸透し、時間と空間を越えて学べるということは、良い面もあるのですが、誰と学ぶかということや、五感を使って学ぶということができないということがあって、それがやはり、教育機関が学生・生徒を1か所に集めて、共に学ぶっていうことの意義を改めてこう感じた、コロナで皆が学校に来られない時に感じたところですが、やはりそういう、経験型とか探究型とか、皆が一緒にある場所に集うっていうことの重要性を改めて、この万博を通して感じたところです。

そして、3点目は文化を通じた学びという、ちょっと変なまとめ方ですけども、御報告の中でもお茶とか、アートとか、書とか、囲碁とか、そういうものをテーマにパフォーマンスしたり、お茶でおもてなしをしたりっていう、取組がなされたということをお伺いして、非常に興味深く思いました。文化というものは、それがないと生きていけないという、直接に、食べ物とか水とかと違う、それがなくても生きていけると思うんですけども、人生にとって何が大事なのか、豊かに生きるとは、どういうことなのかというのは、その文化を通して理解するっていうところがあるし、そのタイパに抗うというのでしょうか、何のために時間をかけているのかというようなことを、改めて考えるきっかけになるのかなというふうにも思いました。

生徒さんの感想に、感覚的に理解できたというようなこともあったのですが、御意見にもありましたけれども、そういう感覚的に理解することも重要なことというふうに感じますが、さっきの五感を通じた学びということと、重なるのかもしれませんが、そういった誰と学ぶか、また五感を通じた学び、文化を通じた学びというものの、改めてその重要性を感じた、こう聞いて感じたところです。それを今後どうしていくかということについては、また後半に話題になると思いますので、申し上げたいと思います。以上です。

#### (鈴鹿委員)

本当に、色々な取り組みをされていると思って拝見していたのですが、まず、前回の万博に関するこちらの会議で、私は前の万博を知らない者として、その時に子ども達も事前学習をしっかりと、目的意識を持っていくのが大事ではないかという発言をしたのですが、実際に、私も万博に何度も足を運んだ者として、あの空間では、逆にそれはなくても良かったかもしれないというふうな考えが変わりました。

本当に、私自身も、娘が小学校1年生で体験させて貰って、1回目に行ったとき、広い空間にあれだけの建物が並んでいるという、まず、それを見たときに、もう圧倒されました。私自身も圧倒されて、子どもも圧倒されている顔を見たときに、この場に、とにかく、いるということの貴重さというのを感じました。そもそもそこにいるということのきっかけを学校で作っていただくというのは、本当に大事だったかと、引率もあの混雑、あの暑さの中で大変だったと思うのですが、それを作られたのは大事だと思ったのは、行って並んだりして、前後の方が子ども連れの方で、お話をする機会が結構あったのですが、割と何組もの方から、子どもが小学校で行って、楽しいし、また行きたいって言ったから、自分たちも連れてきたのです、っていう方が結構多かったんで、そのきっかけ作りが学校にあったというのは、本当に良かったなと思います。

私も、自分の子どもの発言を聞きながら、子ども目線の話になるかもしれないのですが、経験として、本当に万博での経験で、これが他には無いものだなと思ったのは、まずは、当然ながら、先ほど仰っていた多様性を知ること、各文化に興味を持つということ、何でも情報が手に入る世の中で、実際に、そこの方々と会話をして疑問に思ったことは直ぐに聞けるという、その距離感で学ぶというのは、大変学ぶことに対する意欲も出てくるのかなというふうに見ていました。それで、どんどん知りたいそしてその国に行ってみようという将来の意欲に繋がっているなと思ったのが1つあります。

2つ目は、こちらにも似てくるのですが、新技術についても、見たこともないような技術が沢山並んでいる。それを見て凄いなというのと同時に、小さい子どもは、使ってみよう、作りたいということを直ぐに言うので、これもまた将来への道が開けていくのかなというふうに思いました。

あと最後3つ目としましては、自分の今の身の回りのことについて、やはり子供の世界というのは狭いものも普段ありますけれども、情報としては知っているけれど、実際に何かというのを知らない。例えば、自分たちが触れているものが、どこから来るかというような、スマホの電池ですとか、赤十字館を見た時には、どんな災害が他の地域で起こっているよと、そういう自分たちの生活の身の回りにあることと、そのルーツとかを色々知ることができる、また、これも、もっと今起こっていることを知りたいというその将来への、先ほどから未来の懸け橋という話もあったのですが、その将来への色々な知的な欲望というのを、全体的にかき起こされるものだったのかなというふうに思います。

これは単に展示を見るということだけでも、やはりプロの方々が作られた興味を引く展示の仕方なので、知的好奇心が燦って、そして、今後はこの企画をきっかけに、結構、街中でも、また色々な所でパネル展示をされているのですが、そういうのを見るという習慣がついたかなと、万博でこういうのを見て、触って、楽しかったから、これも見てみようという、

単に展示をやり過ぎたというのではなく、学ぼうという姿勢が身についてきているのではないかなというふうに思いました。

また、これを通して、海外のこと、新しいものというのもなんですけれども、翻って、日本にある当たり前のことが、当たり前ではないということで気づく、今の自分達のその現状に気づくということにも、特に小さい子供たちにとっては、凄くそういう力になったのかなというふうに思いました。

後半のことに繋がってくるかと思うのですが、ただ、そういうものを見て、じゃあ、それを見てよかったねというふうに終わる、それはそれで良いのですが、そして、何かのきっかけで、やはり思い出すというのは大事なのかなというふうに思います。

小学生の子ども達、特に低学年の子ども達は、日々新しいことがありまして、それも終わった後は、万博ロスになっていたのですが、新しいものが出てくると、万博どんなのだったかというふうになっているのです。今日、参考に持ってきたのですが、うちではフォトブックを作って、自分たちの行ったところを全部アルバムにしたのですが、こういうことをしたら、その後、これを見て、あの時、これはこうだったというふうに思い出す。今の子どもたちは、携帯とかで写真を簡単に見ることが出来ますから、そういうふうに、自分たちの写真をまた思い出すきっかけにする、さらには、それについて、先程、植木委員が仰っていたのですが、対話をするというのが本当に大事なのではないかなと思います。

この前、写真を見たら、あのときこうだったよね、自分の経験もあるし、あそこに展示してあったのはなんだっけ、ニュースで出てきた国の名前だったら、それって万博にあった、という話をちょこちょこ日常の中でしている。そこで、どうだったかなって終わるのではなく、調べてみて、このとき、あの日に行った、ここにあった国だよというような話をすると、またさらに、そうだ、あのときこうだった、みたいな話が、盛り上がっていくのです。読書でも映画でもそうですけれども、見るだけよりも見た後に、誰かと共有して対話することってというのが残りやすいことなのかなと思います。

その意味では、学校全体で行けるというのは、例えば、先生が授業でこういう国が出てきたよって言ったら、あの時、万博にあったのだよ、ここにあったのだよとかそういう話をしたら、みんなもその情報を持っているわけで、学校単位でいく強みというのはそこにあるのかなというふうに思いました。結構、経験をベースに話させていただいたのですが、そういう色々な同じ体験があって将来に繋がるというのは、沢山あると思いますので、それを後半、今後どういう仕掛けを作っていくか、これは先生方に語りかけるということも大事なのかなというふうに思っています。

#### (安岡委員)

この万博が日本であったということで、今の子ども達は本当にラッキーだなと感じた。というのは、society5.0というのは、ビックデータとかAI、IoT、とかそういったものが2016年に言われてから10年経って、こういったところで、1つの万博という会場ができた、そこに世界中の人が集まって、色々な催しがされる、イベントで体験ができてという中で、1つの仮想空間的な、そういったメタバース的な所が、そこに1つ設定されて、その中に入って体験できたということは、これが、今後のVRとかARとか言われている中で、それを見ていく中で、1つのきっかけづくりに子ども達になるのではないかなというふうに思います。

1つのテーマを持って、展示とか、色々なものを、学校が一体となってやっていた中で、1つの実証実験とか、そういったことも含めて、会場内で世界的、地球規模でできたということ、これは非常に大きな経験値でありますし、これが受けられたというのは、机上の話ではなくて、肌感覚で見られたっていうのは、非常にこれからの子ども達にとっての、世界観というか、その辺のところに、大きなプラスになるというふうに思います。今後、これをどうやって生かしていくかっていうのが、次のテーマであると思います。

#### (前川教育長)

自分が前回の大阪万博に行った時と比較して考えると、本当にどうでしょう、今の子は幸せだなと正直思います。これが学校単位で行けるっていう、もちろん、行けた子ども達の数も多いですし、学年によって何を学んだかとか、何を感じたかっていう違いは当然あると思うのです。中学生と高校生も大きく違いますし、ただ、未来や未来社会等を体験できた、そして、また体感できた、自国の文化と、他国の文化を感じ取って、多様性を感じ取れたとか、様々なことを、彼ら彼女らは感じ取ったのではないかなというふうに思います。

知事が冒頭の挨拶で、安宅先生を御紹介されましたけれども、御講演の中で、これからの時代は、いかに好きを見つけるかということの重要性ということと、それから、今、これからの時代を生きる子ども達は、我々の時代よりも、はるかに沢山の教養が必要だということをおっしゃっていたのが、凄く印象に残ってしまっていて、そういう意味でいうと、全てのそういう条件を学校教育の中で満たすことができない中で、ああいう体験を子ども達ができるっていうのは、非常に大きなきっかけになったのではないかなというふうに思います。

また、例えば、高校生なんかですと、今日、御報告いただいた中でも、主体的に参加している子ども達もいましたし、もちろん、何を意識していたかとか、経験したかによって違いは出るのですけれども、その中から、現在の社会や、自分との比較、そして、それから、これからの社会のあり方とか、自分の生き方を考える機会には、十分だったと思います。なかなか定量的な評価をするのは難しいと思いますが、今回、こういう支援をいただいて、学校単位で、多くの子ども達が万博に行けた、そして、多くのことをおそらく感じ取れたことは、本当に大きな成果だと思います。

#### (西脇知事)

どうもありがとうございました。前半・後半と上手く分けられないと思いますが、かなり後半部分の話に繋がることもお話いただきました。私が前の万博に行ったときには、事前学習、事後学習が全くありませんでした。なかったのですけれども、私の家が商売をしていて、近くのホテルに日本の土産物店を出しており、英語の勉強に、というので、中3の夏の大会が終わってから、ずっと手伝いに行っていたのです。かなり鮮明に色んなことを、場面、場面で覚えてしまっていて、別に、事前学習・事後学習がなくても良いのですけれども。

ただ、ちょっと今回思ったことは、体験学習もやってよかったのですけれども、子ども達が色んな所で経験したとか、特に安宅先生が仰っていたのが、凄く強烈な印象に残るような出来事に、どれだけ出会えるかによって、子どもの未来が変わるということも仰ってまして、その機会は色々あるのですが、万博っていうのは、よく考えたら、凄く労力、手間、お金もかけて、それをかなり集中的に、色んなものの刺激を貰える、経験できる場というのが、しかも、地球規模で用意されるという意味においては、滅多にない機会というのは、まず間違いないと思いますので、そこに行って経験をするということだけでも意味がある。だが、それだけでは、ちょっと、我々行政もお仕事にならないので、そこをちょっと整理させていただきたいということなのです。

ただ、色んな子供たちの心の中とか、その印象の中に残っているものというのを、それを全部引き出すことはできないのですが、それはいつかまたやりたいということもあるということ、そういうことも含めてなんですけれども、後半はあまり時間もないのですけれども、また、小畑委員の方から、今後の特に学校現場とか教育活動にどう生かすかという点について、御発言いただければと思います。よろしくお願いします。

#### (小畑委員)

先程、色んな御報告を聞いていて、1つ物凄く印象に残ったのが、私学で取っておきの例を挙げられたのかもしれないのだけれども、非常に、グローバルで、大学なんかとそういう

取組をされていまして、あるいは、海外と音楽の共演とか、今回、なかなか凄いなと思ったのです。公立学校では、ここまでのことはできてないという感じがするのだけでも、ただ、もちろん、公立学校だって、グローバルとか、大学との関係で色んなことをやっていて、特に、探究留学みたいなことを始めていくっていう事で、ますますグローバルになっていくし、それから、明日へのチャレンジコンテストという、もう5年ぐらいになる探究学習コンテストがあるのですが、これなんかだと、学校と、例えば、IPS研究所とか、それから伝統的な料亭とか、あるいは、サッカーチームの運営会社とか、色んな、非常に多彩な外部の企業とか、組織とか、団体と連携した探究型事業っていうのを5年ぐらい、これなんかも非常に凄いなと思っているのだけ。だから、もちろん公立学校だって、やれることはやっているのですが、なかなか、これ私学のやつは、凄いなという感じがします。

だけど、こういうことはやろうと思ったら、やっぱりこう、こんな万博みたいなイベントのときだけやろうと思っても、なかなかできないわけです。むしろ、日常的にこういうグローバルな、そのような連携とか、色々な音楽とか、なんか連携とかいうことを、日常におそらくやっているのです。全ての私学がそういうことやっているかどうかわかりません。ここに挙げたようなことをやったところは、きっとそうなのだと思うのです。だから、公立学校で、なかなかそこまでやるのも難しいかもしれないのだけでも、1つのなんていうか、お手本というか、見習うところはあるなど、常にそういう日常的な教育活動の中に、こういう視点を取り入れてやっていくことで、何年に一遍かイベントがあると、こういう形ができるのではないかという、そんな感じがするので、やはり、日常的なそういう部分もダイナミックさとか、グローバルっていうのを、さらにどんどん出していく必要があるのではないかなという感想を思ったのです。

ですから、そういうことを考えながら、これからの公的な教育っていうのをやっていかないと、まさに、公立学校と私立学校の競争がますます垣根がなくて、激しくなってくるという世の中で、公立学校の特徴が、ますます薄れてしまうという危惧もあるから、是非、頑張っ

てやっていかなきゃいけないというふうに思いました。それから、前の万博、70年の万博のとき、私も経験したのですけれども、何しろその時は、高度成長の高揚感があったし、それからもう、国民的な、熱狂の中での万博でしたから、そこに行ったことが、もう直ぐ、将来に対する夢とか希望に直ぐ昇華しちゃうような、そういうふうであったのです。わかりやすかったです。例えば、月の石を見て、これは月に行った人が、初めて持って帰ってきたのだとか言って、そしたら、これからは宇宙の時代なのだというような感じで、気持ちが盛り上がる、そういうような万博だったと思うのです。

今回の万博はそうじゃなくて、成熟社会の中での万博だったし、例えば、AIなんか凄くなって皆思うけれども、そしたら、AIがどんどんいったらね、私たちがやりたい仕事なくなってしまうのではないかと、とかいうふうに思う生徒がいるわけです。つまり、その技術革新とか、色んな新しい技術とかの中、明と暗が、子供にも見えるような時代なのです。だから、そういう意味で、やはり、万博みたいなどころでの体験というのが、前の万博みたいにストレートに、将来の夢とか希望とかに思いが繋がらないような、そういう時代的な背景があるのではないかと思うのです。であるがゆえに、その体験をどういうふうに将来に繋げるかというところの橋渡しをするのが、教育なのだと思うのです。

だから、今回の万博の方が、前回の万博よりも、ずっと教育的な努力が必要で、そのことが万博のレガシーみたいなものを子供の中に残そうと思ったら、前の万博は、ほとんどそんな教育なんかしなくたって、皆に残るような時代背景があったのだけど、今回はそうじゃないから。やはり、きちっとした教育をしていくっていうことが大事なのだというふうに思うのです。その時に、一過性で終わらせないという、そういうフレーズが色々御報告にもあって、それはその通りだと思うのです。

まずは、やはり、冒頭に私が申し上げたように、万博のレガシーをきちんと子供の心の中に残すということが大事で、それがスタートラインになると思います。そういう意味でいう

と、例えば、これは、さっき申し上げた感想文もあるし、あれはそんなことで駄目じゃないかと言っているわけじゃない、あれも大事なのです。だけど、そういうことを感想文に書いた子ども達も、万博の会場で色んな世界の人がいたとか、新しい展示があったよねとか、何か他所の国の色んな展示があったりなんかしたよね、というそういう体験をしているはずなのです。だけど、そういう体験が、その自分の体験の海の中に沈殿してしまっているのです。なんか表層的なことだけが、感想として出てきているってということだから、やっぱり、何をしなきゃいけないかという、その記憶の海を攪拌して、もう少し大切な沈殿してしまっている体験を、表層に浮き上がらせるということが大事だというふうに思うのですが、それをやるのが1つは教育なのです。それは何をやったらいいのかって言ったら、色々あるかもしれないけども、やっぱり、その体験を振り返るとか、その体験を蘇らせるとか、落ち着いた雰囲気の中で、もう1回、その体験を色々考えて、皆で話し合っ、それでそれをその将来の思いに繋げていくという、そういうような教育的な機会を作っていくということが、私は必要なことじゃないかなというふうに思います。

それと、もう1つ、パソナ館に行って、心筋シートがこういうふうに自動でパッパッパッと動いていて、私も再生医療はここまで来たのかと思ったのだけど、隣に全然知らない小学生の高学年ぐらいの子どもさんがいて、その子どもさんが、しきりに、親になんで勝手に動いているのかと聞いていたのです。ところが、親御さんも、それをきちっと説明できるだけの知識がないから、あんまりきちっと説明できてなかった、私も説明できるだけの知識がないから、黙って聞いたのですが、ああいう、疑問を感じたときに、きちっとこうなんか専門家が説明できたら、そのことだけでも、私は再生医療のお医者さんになりますとかって思ってくると思うのです。だけど、そのまま、訳分かんないから終わっちゃうと、そういう気持ちが起こってこないから、レガシーが残らないって、そういうことがあると思うのです。だけど、これはしょうがないと。

だから、それをもう1回、やり直すというか、今度、心筋シートが中之島クロスで、もう1回展示があると聞いているのですが、例えば、パソナ館に行った学校があったら、もう1回、中之島クロスに行って、そこで専門家の話を聞くとか、あるいは、その心筋シートみたいな再生医療がもたらす社会は、どうい社会なのかというテーマで、探究学習して、その一環で、中之島クロスへ行って、研究者とその探究であるとか、しっかり学んでいく、そうすると、次に繋がって、将来に繋がる思いが出てきたりするのではないかなと、こういうふうに思うのです。

それは、アンドロイドでも一緒に、アンドロイドを万博で見た子どもが、今度、けいはんなにアンドロイドが来るといことですから、良い機会があって、そこに行って、今度、アンドロイドがもたらす社会はどんな社会だとかというような探究的なテーマで、今度は研究者の方とか、あるいは、企業の方にもちょっと協力をしていただいて、そういう探究型の学習をして、万博の体験だけだと膨らまなかった自分の気持ちというのを、しっかりと身につけていく、というようなことをしていくということが、万博を体験だけに終わらせないで、しっかりと将来に繋がる子どもにとってのレガシーを確立していくことになるのではないかと思います。

70年万博よりも、ちょっと難しい時代を、あるいは、難しい科学技術の中で、そういうレガシーを作っていくっていくためには、そういう教育が必要なのではないかと、というようなことを思っております。探究活動以外のことで話してということですが、探究活動の話になってしまっ、本当に申し訳ございませんが、そんなことを考えております。

#### (藤本委員)

探究エキスポの冒頭で、最初、西脇知事が仰いましたけど、私も初めて寄せていただいて本当に感動しました。その中で、アドバイザーの先生方が口を揃えておられたのは、決められたことをやるのではなくて、自分たちがやりたいことをやります、これが本当の学びにな

る、トップダウンではないけど、それが大人から見て意味があるのかとか、こんなこと何のためにやるかっていうことは、二の次で、とにかく、自分が興味・関心を持ったことを突き進むというところに本当の学びがあるのだ、ということを抑っていました。その通りで、それを具体化したのは、万博だなというふうに思ったのです。そういう意味では、凄く良いお手本と言いますか、探究エキスポ、こういう形で、是非、この事後の探究の学びというものを、あの形に準えていけばいいのかなと、探究エキスポに、これを全て重ねるといふことばかりではないかもしれないけど、凄く良い成功事例なのではないかなあというのが1つあります。なので、別に学校で、先生達がテーマを決めてこれをやれではなくて、せつかく、これは学校単位で皆が行っている訳ですから、共通の場を複数の生徒達が見ているわけですから、生徒たちに対話をしてもらって、それでプロジェクトのテーマを決めていく、深堀をするテーマも決めていくみたいな、そういうプロセスが取れたら良いのではないかというふうに思います。

さっきの不登校の子供の話も、やはり、与えられたものではなく、自分がやりたいことを見つけたという主体的な学びというのがあったから、学校にまた行き始めたこともあると思うのです。その辺りが1つ大きく思うところ、そういうところに、何かこう、京都府が持っている、文化的な、府立図書館であったりとか、いわゆる博物館であったりというようなものが上手く絡み合っていくと、凄く良いのかなって。探究エキスポで、フィンランドに行った高校生が、フィンランドの図書館は市民に開放されて、本を借りるだけではなくて、本当に文化交流の場所だった、みたいな話をされた、そういう学校だけじゃなくて、そういう文化的なもの、伝統的なものも含めて、絡んでいくと良いかなというのが1つ。

それと、小畑委員が仰っていた、幼・小・中・高、府立、公立学校だからこその特色です。これは、僕はやはり、串を横に挿すということが1つ、私立学校はどうしても、点でそれぞれの学校が色んなことをやるけれども、府立の場合は、その色んな府立高校が一緒に取り組めるという、いわゆるスケールメリットを生かしていく、1つの大きなテーマで、同じ方向を皆が向いて、やることはそれぞれだけれど、統一感を持って、深堀できるという意味では、やはり府立高校、公立高校の強みではないかなというふうに思うので、何か緩やかな統一成果を持ちながら、皆でやっていく、それを皆で発表していくような探究エキスポみたいな場所を作るのも1つだろうかなというふうに思うのです。そこに何かこう、行政に政策提言をしていくとか、民間会社に提案していくみたいなことで、いわゆる職業訓練的なことであったり、行政に関心を持ったり、教育に関心を持ったりということもあると思います。

あともう1つは縦のところで、高校生が自分達の深めた学びを中学生に出前授業するとか、小学校に教えてあげるみたいなことで、教育というものにも関心を持つきっかけになるかもしれないし、色々な可能性があると思うので、そういうのが出来るのが、やはり公立学校の強みだと思うのです。その辺を是非、何か前に進めるというのを思います。

#### (植木委員)

先程、鈴鹿委員が仰っていた通りのところかなと、今後、重要なことというのは、体験を体験したままにするのではなくて、その後、折に触れて思い出すということで、それは、学校の先生の語りかけということも、もちろんあると思うのですけれども、先程、感覚的に理解するっていうのは、大事だっていうふうに申し上げたのですけれども、それとちょっと矛盾するようなんですけれども、そこで終わらずに、やはり、その知識の裏付けっていうのも必要なことなので、それをもう1回振り返って、自ら対話をしながら自分達で調べるっていうこと、そして、さらに、藤本委員が仰っていたように、それを発信する場、大人としては、子ども達がそれを発信する場を設定してあげられると良いのかなというふうに感じました。

最近、学習意欲が、乱暴なまとめ方をすると、ちょっと下がり気味で、勉強して良い学校、大学に行って、就職をして、そしたら幸せになれるっていうのは、そういう単純化され

た学力信仰みたいなものが無くなって、親御さんは、子ども達は楽しく学校で過ごせば良くて成績は別に良いというような意識になっておられるとか、そういうようなことが指摘されますけれども、勉強、知識の欲求、鈴鹿委員が仰っていたような知的好奇心というのは、知識と知識が繋がるとか、知識と体験が繋がるといふ、その繋がるところに、その気づきっていうのが、エンジンになるかなというふうに思うので、万博というのは、そういう意味で、非常に良いきっかけになるのかなと思いました。

そして、生徒達が調べるといふ時に、高等教育機関との連携というのも始まっていますし、今でも自分の経験で言っても、生徒さんが何かこういうことについて調べたいと言ったら何か調べて来るんです、学校を通して、話を聞きに来るといふことをしてくれて、楽しいんですけれども、そういう、個別に、今やっているようなことがもう少し、系統的に出来ると良いかなというふうに思います。藤本委員が仰っていたように、博物館や資料館、図書館というような機関も、そこに巻き込みながら、自分たちの通っている学校以外の様々な機関との連携っていうのが、広がり、京都は沢山大学のある場所ですので、上手く連携できると良いのではないかなと感じています。

#### (鈴鹿委員)

小畑委員が後半に言われたことと同じようなことを、私も考えていたのですけれども、やはり、せっかく京都にアンドロイドが来るので、そういうのは、また学校単位で行くというのも良いなとは思っていました。対話という話を先程しましたが、質問をして、その答えが返ってこないとか、よく分からないとなると、一番、子供たちの心が折れてしまうのかなと、それで、質問して分からないから、一緒に調べようと、どういう調べ方をしたら良いかなと、答えが出せないならば、そういう調べる手段を作っていくというふうに、疑問に思ったことを、まず、生徒さん達に、おそらく、万博に行って疑問に思ったことがゼロということはないと思うのです。

そこで、疑問に思ったことというのを挙げてみて、それを知るにはどうすればいいか、もちろん、その場の万博で、そのプロの説明を聞くというのが一番良いことだったのですが、それが叶わなかった場合は、何をしたら調べられるのか、また、そのためのツールを学校側が示してあげて、こういう人に聞いてみようかとか、こういう書籍を調べてみたいじゃないかというような、質問に対しての答えが出てくるというのを示してあげるといふのは、今後、その知的好奇心も潰えないようにする、大事な事かなというふうに思っています。

また、そこで、これはうちの会社の例なのですけれど、会社でも社員旅行で全員が万博に行ったのです。全員が行くという、それは学校の子達と一緒に、全員が、先程も話が出ましたように、どんどん話が盛り上がってきて、自分はこれが好きだった、大人ですから、そのどうしてだろうというよりも、自分はこれが好きだった、あれが欲しかったという話を、結構長いこと、7月に行ったのですけれど10月位まで、結構、皆しゃべっていたのです。そのしゃべっている中で、先程も、自分も何が欲しいというのをみつけるというのは、私も会社に入ってくる子を見ていて思うのは、その好きなものがわからない子が結構いて、自分はこれが好きだよっていう感覚を思い起こすためにも、そういう話をしていくというのが大事なかなというふうに思いました。

最後に、私が聞かれて困った質問が、娘に聞かれて、万博って何であるのと聞かれたのです。これは、凄く難しい質問だけれども、これはちゃんと答えてあげないといけないなと思って、私も答えを探しているところなのです。これに、そういうこと一つ一つに、大人が、いやそういうものだよ、とか答えるのではなくて、向き合っていくという、学校の先生も、万博もそうですが、他のことについても、答えることが大事な事かなというふうに思いました。

#### (安岡委員)

これは、万博というものに対して、きっかけづくりとしてはあった訳で、これは大きな仕掛けの中で、取捨選択しながら、どうやっていくかというところがあると思うんですけど、他国との地球規模で考えたことがあれば、万博の中で大きかったかなと思うし、その中では、家族との交流をやっていくっていうのは、その中で生かして欲しいと思っています。

その中では、やはり、それに対してはお金もかかってくるから、その辺のところの予算的なものもありますし、GIGAスクール構想っていうのが、2019年ぐらいから6年ぐらい前から出てきて、1人1台の端末でICT云々が出てきている、これも次へ通じていくステージに入ってきていると思うので、その中で、万博というのと、体験をする予算を取っていく、その中で、これに対して、子どもの感覚とやはり大人の感覚というのは違いますから、そこをどうやって教員の先生方が、それに対して理解をしていくっていう、その内に対する教育というのをやはりこれからも必要になってくるし、我々も研修していかなければならないというふうに思っています。

#### (前川教育長)

万博は毎年できるわけじゃないので、万博が終わったこれからは、どういうふうに考えるかっていうことなんですけど、当然、異なる世代とか、地域とか、高い専門性、匠の技とか、そういうものに触れたり、繋がったりできたんですけど、ですから、ポスト万博と考えた時に、我々が、そういう仕組みであったり、あるいは、繋がるようなサポートをしていくのは非常に重要なところなのかなと思います。

好きとか、不思議とか、なぜとか、そういうことを子ども達が追及できるような環境づくり、といえば簡単ですけども、そのためには、やはり、各学校単位でいうと、繋がりを作るっていう事が非常に難しいことなので、それを行政が、例えば、その繋がりづくりをサポートするとか、あるいは、もっと京都府に依拠したコミュニティを作るとか、そういうことを考えていく、ただ、京都の中に、少し劣ると思いますが、日常の万博を作っていく、大層ですけど、そういう何か施策みたいなことを展開していけたら、子ども達もしっかり応援することになるのかなというふうに思います。

#### (西脇知事)

ありがとうございました。前川教育長の話もそうなのですが、おそらく、10年後位にはなるんですけど、万博に行った子ども達が、何かを行うに当たり、このきっかけは万博だと言う子が沢山出ると思います。しかし、成果として、私は重要なのが、まさに壮大な、本当に手間と暇とお金をかけて、子どもだけでなく全ての世代にとって、非常に刺激になるというか、好奇心を満たすような仕掛けとか、文化も、科学技術から、グローバルだっていうのを一遍に1つの場所で提供された。だからこそ、実は子ども達にとってみれば、ずっと毎日毎日の生活の中で、そういう好奇心を満たすようなことが起こるというか、逆に言えば、日常の万博を作ることと前川教育長が仰っていたように、いかに、その子ども達に、日頃から、子ども達の好奇心を満たすようだとか、刺激するようなどか、そういう日常を子ども達に与えることに繋がられるとすれば、1つ万博の成果を教育活動に生かすことになるのではないかと思います。

それから、もう1つは、やはり、公立の縦串、横串の話とか、縦の世代間を超えたっていう話も、実は、万博に行くところはクラス単位とか学校単位ですけど、後で行われている交流とかいうのは、まさに、国も越えて世代を超えたところで行われているっていう、そういうことを、また、教育現場に生かすとか、色んな活かし方があると思います。

我々行政にとって見れば、いかにそういう仕掛けを作っていくか。その1つの例が、今回の、探究学習という、まさに府立・市立を超えた取組だし、令和8年度から行うトビタテ留学ジャパンは、府立・市立だけではなくて私立も入り、しかも経済界とも連携するという仕

掛けもあって、これは短期の留学制度ですが、行き先とテーマは、子ども達が決めて、それを審査して選んでもらえれば、留学できるので、まさに生涯、非常に影響が出るような体験ができるとか、そういうものをどれだけ、学校現場が目指す目標に向けて、学校現場だけでは用意できない部分をどうやって、企業や社会、行政で、用意することができるかということも、非常に重要です。これだけ子供さんが少なくなっていますので、我々もそういう意味では、非常にこういう人材育成に社会を挙げて、例えば京都を挙げて、取り組まなきゃいけないなと考えています。

その参考にというか、その道標のようなものが、今回、万博に子ども達に行ってもらったことかなと私自身は解釈していきまして、是非、今後に生かしていきたいと思っております。御意見いただきましてありがとうございました。